

した功によつて、農商務大臣の追賞を得た。
ナガエマチ 長柄町 金澤の町名。もと藩侯の御長柄小人の住宅のあつた所であるからこの名がある。後御長柄小人は漸次轉住して普通の地子町に成つた。

ナガエヤハクケイ 長江屋柏藁 金澤の俳人。所居を寄老庵又は喜老庵といふ。通稱太兵衛。天保七年行々子を出版し、梅室これに序した。

ナカオキウチ 中興氏 ナゴキ 親元日記寛正六年七月三十日の條に『賀州得光信濃入道進上太刀糸云々。中興掃部助太刀云々。同左衛門四郎云々。』文明十年九月十七日の條に、『中興龜壽丸親父掃部助入道妙宗云々』とあり、又殿中申次記永正十三年乃至十七年に中興加賀入道などが見える。是等は何れも石川郡中興保の人であらう。

ナカオキシヨウ 中興庄 ナゴキ 後太平記明徳三年正月四日前年の京都合戦の行賞の條に、大内義弘の次男弘正が小林と差違へて、父兄の難を助けた爲、その子藤丸當年二歳なるを京都に召し、加賀國中興庄を興へて冷泉家の家督としたとある。かうした事實と、中興庄なるもの、存否とは明らかでない。

ナカオキホ 中興保 ナゴキ 石川郡に在つた。應永廿一年四月廿九日將軍足利義持が倉光藤丸に賜はつた教書に、中興保内參町二段と見え、又藤涼軒日録長享二年八月廿八日に、『常在新御寄進之在所、賀州中興保事者、奥清水坂之神護寺相論之子細有之。』ともある。後世變じて中興郷となる。

ナカオクゴウ 中興郷 或は中興に作る。石川郡に屬し、藩政時代では番匠垣内・町・幸

明・橋爪・橋爪新・田中・徳用・柳町・乾垣内・三日市・稻荷・堀内・田尻・蓮花寺・享福寺・長竹・清金・今西・福正寺・末松・木津・安養寺・七原・行町・針道・日向、以上廿六ヶ村を含んで居た。

ナカガハ 中川 羽咋郡邑知郷に屬する部落。中川村の名は大永六年十月一宮社務職年貢米錢納帳にも見える。能登名跡志に、『中川村近し。太郎右衛門というて、利家公より御扶持頂戴の者あり。山廻役なり。』と記する。

ナカガハ 中川 鹿島郡白馬領なる大谷内・濱田谷内二ヶ所から流出し、國分領で捨越川に落ち合ふ。落合までの流程三軒餘。

ナカガハアキタタ 中川顯忠 通稱清次郎。清六郎・八郎右衛門。天明五年幼少で父八郎右衛門の遺知三の一を襲ぎ、八年本知五千石に復し、寛政四年定火消、享和元年寺社奉行兼公事場奉行に任じ、文化十一年御家老に進み、十二年十月六日四十二歳を以て歿した。

ナカガハキユウエモン 中川久右衛門 祿八百石。大坂再役に奮闘し、有馬屋敷で首一つを獲た。其の子主馬後を襲ぎ先簡頭を勤めたが、子なくして絶炊した。

ナカガハコレタタ 中川惟忠 通稱八郎右衛門。式部。初諱長裕。元文四年式部長定の遺知五千石を襲ぎ、延享元年定火消、寛延三年御家老に任じ、寶曆七年八月十七日四十四歳を以て歿した。

ナカガハシゲカツ 中川重勝 通稱宮内・八郎右衛門。光重の養子。祿五千石を受け、明暦三年歿。

ナカガハシゲヨシ 中川重良 通稱七兵衛。前田綱紀に仕へて千石を領したが、病を療せんが爲南都に赴き、寛文十一年その地で歿した。

た。重良は半睡軒と號し、平岩仙桂に學んだといふ。

ナカガハゼンゴロウ 中川善五郎 明和六年父金太夫胤就の遺知二百石を襲ぎ、御馬廻に班したが、天明八年八月十一日金澤城内土橋御門泊番中、恣に三丸御番所に往つたこと露顯し、十二月十八日能登島流刑を命ぜられ、寛政元年五月十三日曲村に赴いた。時に四十五歳。四年六月十日配所御免。

ナカガハナガカツ 中川長勝 通稱宮内・八郎右衛門。光重の弟半左衛門の長子で、光重の養子となつたもの。半左衛門は徳川氏に仕へて三千石を受け、寛永六年に歿した。長勝前田利長に仕へて千石を受け、光重の歿後その養老俸中四千石を加へ、大坂兩役に從うて夏陣に槍功があつた。明暦二年歿して子なく、外甥瀬川八郎右衛門長種を養うて後を承けしめた。

ナカガハナガサダ 中川長定 通稱金十郎。清六・式部。元祿十三年父采女長輝の遺知五千石を襲ぎ、十六年定火消、享保九年御家老、後加判に補し、二十年指除かれ、元文四年六十五歳を以て歿した。

ナカガハナガタネ 中川長種 通稱八郎右衛門。瀬川半兵衛の子で、中川八郎右衛門重勝の養子となり、祿五千石を受けた。萬治元年大横目に任じ、延寶八年十一月致仕して意半と稱し、元祿十四年七月歿。

ナカガハナガテル 中川長輝 通稱采女。八郎右衛門長種の子。新知七百石を受け、寛文元年御歩支配に任じ、延寶三年新番頭となり、八年家督を繼いで五千石を領し、元祿三年寶圓寺請取火消に任じ、十三年父に先だつて歿した。

ナカガハノタロエモン 中川の太郎右衛門羽咋郡中川の百姓。前田利家能登入國の頃馳走した廉を以て、扶持高十五俵を賜はつた。太郎右衛門また十村を命ぜられ、二代太郎右衛門三代太郎右衛門並びにその職を襲いだしたが、明暦元年に至つて除かれ、扶持高は四代太郎右衛門に傳へられた。

ナカガハノリヨシ 中川典義 通稱逸角。采女・式部・八郎右衛門。文化十三年養父八郎右衛門顯忠の遺知五千石を受け、同年定火消、文政十一年寺社奉行、天保元年御家老に任じた。

ナカガハハチエモン 中川八右衛門 初め三四郎。織田信雄に臣事し、次いで能登七尾に於いて前田利家に仕へて二千俵を受けたが、一たび浪人となり、元和元年利常から八百石を得て復仕し、寛永十年十二月廿二日歿。子孫藩に世襲する。

ナカガハミツシゲ 中川光重 通稱清六。尾張の人。初め織田信長に仕へ、天正十年二十一歳で信長の子信忠に従ひ信濃高遠城を攻めて功があり、尋いで前田利家の女蕭姬を娶つたので、信長薨後來つて利家に來仕した。十一年利家金澤に移り、光重は利家の兄五郎兵衛安勝・高島定吉等と共に七尾城を守り、十三年定吉等越中の神保氏張の裨將の守る荒山を攻めた時、光重の部下能く戦うた。光重嘗て茗事に耽りて修城の課役を怠り、爲に世子利長の怒を招いたが、利家は之を聞き、その罪輕からざるも我が女婿を嚴刑に處するに忍びずとして、十七年能登の津向に謫した。幾くもなく豊臣秀吉に仕へて譚伴となり、三

て歿した。

ナカガハハチエモン 中川八右衛門 初め三四郎。織田信雄に臣事し、次いで能登七尾に於いて前田利家に仕へて二千俵を受けたが、一たび浪人となり、元和元年利常から八百石を得て復仕し、寛永十年十二月廿二日歿。子孫藩に世襲する。

ナカガハミツシゲ 中川光重 通稱清六。尾張の人。初め織田信長に仕へ、天正十年二十一歳で信長の子信忠に従ひ信濃高遠城を攻めて功があり、尋いで前田利家の女蕭姬を娶つたので、信長薨後來つて利家に來仕した。十一年利家金澤に移り、光重は利家の兄五郎兵衛安勝・高島定吉等と共に七尾城を守り、十三年定吉等越中の神保氏張の裨將の守る荒山を攻めた時、光重の部下能く戦うた。光重嘗て茗事に耽りて修城の課役を怠り、爲に世子利長の怒を招いたが、利家は之を聞き、その罪輕からざるも我が女婿を嚴刑に處するに忍びずとして、十七年能登の津向に謫した。幾くもなく豊臣秀吉に仕へて譚伴となり、三

て歿した。

ナカガハハチエモン 中川八右衛門 初め三四郎。織田信雄に臣事し、次いで能登七尾に於いて前田利家に仕へて二千俵を受けたが、一たび浪人となり、元和元年利常から八百石を得て復仕し、寛永十年十二月廿二日歿。子孫藩に世襲する。

ナカガハミツシゲ 中川光重 通稱清六。尾張の人。初め織田信長に仕へ、天正十年二十一歳で信長の子信忠に従ひ信濃高遠城を攻めて功があり、尋いで前田利家の女蕭姬を娶つたので、信長薨後來つて利家に來仕した。十一年利家金澤に移り、光重は利家の兄五郎兵衛安勝・高島定吉等と共に七尾城を守り、十三年定吉等越中の神保氏張の裨將の守る荒山を攻めた時、光重の部下能く戦うた。光重嘗て茗事に耽りて修城の課役を怠り、爲に世子利長の怒を招いたが、利家は之を聞き、その罪輕からざるも我が女婿を嚴刑に處するに忍びずとして、十七年能登の津向に謫した。幾くもなく豊臣秀吉に仕へて譚伴となり、三